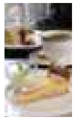
味・美・楽Shop

cafe Villanda カフェ ヴィランダ

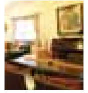
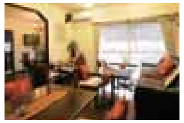
理想の家族に囲まれているような ほっこりくつろげる自宅カフェ

●週替わりランチプレート1（右上から時計回りに）豆豆サラダ、かぼちゃナッツサラダ、ケークサレ、チキンのラタトゥイユ煮、グリーンサラダ。コンソメの野菜スープとパン、ドリンクがセットで。アッサリ優しいお味でペロリと食べられる（1,050円）

●6色のトッピングパレット付ドライカレー コクのある味わいと絶妙な辛さに「隠し味はなんですか?」とよく聞かれるのだとか（735円）


●デザート くるみのシフォンケーキ、洋梨のタルトアイスクリーム添え。ドリンク付きのケーキセット（750円）は大人気。これを囲んでお喋りが何時間でも弾むそう

●自家製ハムのサラダプレート
自家製のハムがタップリ乗ったサラダは、意外なほどボリュームあり!（735円）



パキスタン製の家具も置かれたインテリア。季節ごとの「衣替え」も楽しみ

すでに評判の高い当店。開店時間前にお客様が待っていることも

可愛い看板も全て手づくり。小さな部分にもセンスの良さが

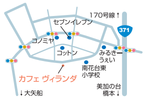
まるで、とびきり優しくてセンスのいい親友のお家に遊びに来たような気持ちにさせてくれる「cafe Villanda」は、何時間でものんびりしたくなる場所。ニューヨーク、香港など世界中を飛び回っていたご家族ならではの開放的で明るいセンスと人柄が「自宅カフェ」という新しい形を確立しています。さらに驚きなのが、カフェショップを開くにあたり改装は全くしていないとのこと。

「もともと、自分でいろんな物を作っておもてなしをするのが大好きなんです。お花を飾るのも、お料理を作るのも、部屋を飾るのも大好き。そんな自分の『大好き』を全部叶えながら、人様に喜んでもらえる仕事がカフェショップだったんですよね」

何度も「大好き」という言葉が飛び出すオーナーの北野さん。ピョンピョンと跳ねるように話す口調と笑顔は親しみやすく、それもお店の魅力のひとつとなっているのでしょう。クチコミでどんどんお客様が増え、その反響にはご本人が一番驚いているのだそうです。

内装のデザインやお料理はお母様が担当、メニューや看板、HPのデザインは娘さんが担当し、名タッグで「背伸びした緊張するスペース」ではなく、「いい気分でゆっくりと心安らげる」空間を作っています。実際何時間もお喋りをしてくつろぐお客様も多いのだとか。

1月からは、人気の週替わりランチプレート（1,050円～）も2種類から選べるようになっていますが、お料理のテイストも外食にありがちな味の濃さは無く、滋養と優しさたっぷりの「料理上手なママの味」。季節の野菜をパウンドケーキにタップリ焼きこんだ「ケークサレ」をはじめ、栄養バランス抜群のまろやかな味付けで、どれも食べた後は思わずホッと、幸せのため息をついてしまう"安心感"に溢れています。これからも手づくり料理と「家ならではの安らぎ」を守り、提供し続けたいという北野さん。2010年7月オープンしたばかりにも関わらず、すでに心のオアシス的カフェとして人気なのも納得です！



お店データ
- ●最寄駅：南海高野線三日市町駅から徒歩15分
- ●住所：大阪府河内長野市南花台2-12-10
- ●Tel：0721－68－8929
- ●営業時間：ランチ11:30～14:00 カフェ14:00～17:00
- ●定休日：土曜日・日曜日・祝日
- ●駐車場：軽自動車で2台分のスペースあり

★ご来店の際「リビングフレッシュを見ました」と言っていただくとお持ち帰り用パウンドケーキをプレゼントします。（2月末まで）

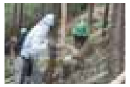
コラボラボ 協働（コラボ）で街を元気に

「アドプトフォレスト天見 冒険の森づくり」

みんなで豊かな森林を守ろう

天見の出合ノ辻で山桜とケヤキの植栽をする高島屋の社員さん

林業不況などで、竹林が拡大するなど荒れた森林が増えています。面積の2/3を森林が占める河内長野市でも事態は深刻ですが、一方では荒れた森林を手入れして豊かな森と美しい水を守ろうという活動が広がっています。たとえば2006年2月に発足した市民団体の、河内長野森林ボランティア「トモロス」（番家靖雄会長・会員79人）。森林保全に必要な知識や技術を研修した会員のうち、常時40人ほどのメンバーが2班に分かれて各々月2回ほど岩湧山を中心に森林に入り、作業道を造るところから始まって本格的な保全活動を行っています。


島の谷で間伐皮むき作業をする大阪芸術大学生たち

2008年には、このトモロスの手を借りて、高島屋の社員（タカシマヤ一粒のぶどう基金大阪支局）や大阪芸術大学の学生らによる「アドプトフォレスト天見・冒険の森づくり」が始まりました。アドプトフォレストとは「森の養子縁組」。大阪府の仲立ちで河内長野市と森林所有者、企業や団体などが手を結び、森づくりを行うという、府の制度を利用した取り組みです。高島屋チームは12月に天見の出合ノ辻で山桜やケヤキを植栽した後、草刈りや間伐作業を行い、その際に出た間伐材で売り場のカウンターやベンチを制作。翌年2月には大阪芸術大学チームが島の谷の林道で作業を行い、学園祭では間伐材で創ったオブジェを発表しました。

間伐材を使って制作した大阪芸術大学生らの作品

「皆、森林浴をしながらスポーツする感覚で楽しんでいます。うっそうとした山も、手入れすると見通しがよくなって本当に気持ちのいいものですよ」（トモロスの番家会長）。

●問い合わせ先=河内長野森林ボランティア「トモロス」Tel:0721-53-3232（駐在不定期）

風物誌 このまち大好き!みなみかわちの風物詩

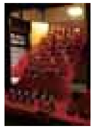
富田林・じないまち雛めぐり

江戸時代の町並みで 出会える100組のお雛様

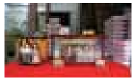
2日間で平均2万人が訪れるという雛祭りイベント

白壁や本瓦、※虫籠窓を備えた江戸時代からの町並みを残す富田林市寺内町。この界隈では3月の、第2土・日曜日になると菜の花と共に一斉に民家や商店の軒先、寺院などの街角にお雛様が飾られ、春の節句を祝う「富田林・じないまち雛めぐり」が開催されます。

今では町の名物イベントとして、すっかり定着したこの催し。町を愛する女性たち数名によって発案され、寺内町の町おこしのため月1回催された「じない市」の目玉行事として2007年3月に行われたのが始まりです。2年目からは地域の人たちや行政も加わる町ぐるみのイベントに発展。飾る場所も当初の50カ所から100カ所ほどに広がりました。「当日はお雛様と一緒に普段は家の中で過ごすことが多いおばあちゃんも軒先に出てきて、雛祭りにまつわる昔話を聞かせてくださることもあるんですよ」と、主催する「富田林駅南地区まちづくり協議会」理事の阪本光枝さん。寺内町センター には、江戸～明治時代の古いお雛様も並びます。


お雛様は街角だけでなく建物の中でも展示されます
※展示される雛人形は毎年変わります。

今年は、3月12日と13日。午前10時～午後4時（雨天決行）。周辺では、お茶会や、南河内の特産品や野菜を販売する「雛の楽市」など賑やかなイベントも行われます。


町のあちこちでお雛様に出会えます

※虫籠窓=虫籠のように目のこまかい格子をつけた窓

●問い合わせは、富田林じないまち文化トラスト Tel:0721(23)5564
※近鉄「富田林駅」または「富田林西口駅」下車すぐ（近辺には駐車場がありません）

第11回 ボランティア・市民活動フェスティバル

テーマ **咲かせよう大輪の花** 入場無料

開催日時 2月27日（日）〈午前10時～午後4時〉
会　場 市民交流センター（キックス）

●展示 ●フリーマーケット ●ステージ ●実演 ●プチボランティアコーナー ●軽食 ●小・中学生ボランティア絵画展

〈主催〉河内長野市立市民公益活動支援センター（るーぷらざ）Tel.0721-53-8100
［指定管理者］特定非営利活動法人かわちながの市民公益活動推進委員会
〈後援〉河内長野市教育委員会

参加団体数/54組

編集後記

「本命も総理も毎年代わってる」。これは、チョコレート会社が募集した「バレンタイン、今どき川柳」の今年の優秀作の一つです。もうすぐバレンタインデーです。20年以上も前に外国人の集いの会話の中で、偶然バレンタインデーの話が出た時に女性から男性にチョコレートをプレゼントして愛を告白するのは日本だけだと少しバカにした口調で言われ、ムッとしていたら、横にいた韓国出身の友人がボソッと、「自国でもそうだ」と呟き、お隣の国にすごく親近感を持ったのを鮮明に覚えています。しかしその時に義理チョコもあるのか聞き洩らしたのは今でも残念でたまりません。昔、会社で貰ったチョコをいっぱい抱えて帰宅したら、たくさんの女の人からチョコを貰ったと幼い娘から真剣に怒られた記憶があります。しかし、しばらくするとその義理チョコを彼女は当てにするようになり、今年は少ないねと文句まで言うようになったことで娘の成長（?）を実感したのも懐かしい思い出です。皆様は今年、どうされるのでしょうか。世界でも珍しい義理チョコの風習が段々と廃れてきていると聞いております。チョコを貰って喜ぶ人がいるのなら、それはそれで安い投資かもしれませんよ。（Y）

Fresh People 特集 フレッシュピープル

いきいきと素敵に暮らす人たちを紹介します 14 狭山で陶工房「星々居」を開く陶芸家・中尾 万作さん

うつわの中に人生あり——

「食器に凝るのは、美味しいものを作って食べさせてあげたい家族や大切な人がいればこそ。器に凝る人は幸せな人生を送っている方なんです」

婦人雑誌や料理雑誌の美しいグラビアにもしばしば登場し、食器にこだわる料理人や女性たちの心を魅了する中尾万作さんの食器。一つひとつがアートのように美しく、また盛り付けてよし、口につけてよし。その上、軽くて洗いやすく、収納しやすくて割れにくい…というのが人気の理由です。隣町の大阪狭山市山本にある万作さんの陶芸工房「星々居」を訪ねました。

プロフィール

◆中尾 万作（なかお まんさく）さん

1945年大阪狭山市生まれ。京都市の友禅の染工房、静岡県伊豆市にある染工房を経て1973年石川県能美市の九谷青窯に入社。1988年、大阪狭山市に陶工房「星々居」を開設。

「若いころは迷ってばかりでした」と、振り返る中尾万作さん。高校を中退して、アルバイトを転々。「手仕事がしたい」と、京都で友禅の絵師として歩み始めたものの、体調を崩し、転地療養を兼ねて伊豆へ。そんな迷いの中で出会ったのが古美術鑑賞家の秦秀雄氏でした。秦氏は、料理で有名な北大路魯山人の開いた料亭『星岡茶寮』の支配人としても活躍した人物。

「その秦さんに書や画、陶芸や料理の楽しさを教わったんです」。

秦さんの紹介で門を叩いた石川県にある九谷青窯は、日常使いの器を既存の流通によらず、世に出そうと若い陶工たちが集まって始めた工房。

「分業ではなく、一人ひとりが最後まで仕上げるというものづくりと、陶工の感性に任せる自由さが、性に合ったんでしょうね」。

友禅の絵付けの技術を持つ万作さんは、これを陶芸に活かして独特の作風を生みました。

個展では百種類のうつわを

同じ道を志す紀子さんを伴侶に、郷里の狭山に陶工房「星々居」を開いたのは1988年。工房では、土採みからロクロ形成、削り、素焼き、絵付け、※釉掛け、本焼きまですべて手作業で行います。磁器なのに灰味を帯びた地肌にプツプツと小さな凹凸をつけたニュアンスのある表面は、万作さんならではのもの。これは九谷の土に、工程の中で撥ねられた粗い砂を混ぜるという独自の工法から生まれます。

窯の燃料はガスです。「1300℃の高温で約17時間もの時間をかけて焼成すると、薪窯に匹敵する味わいが出るんです。焼きあがりを待つ時間は、何年この仕事をやっていても緊張しますね」。

大阪や東京、名古屋などで年4、5回開く個展では新作をまじえ、毎回約100種類もの作品を出品します。染付、色絵などの技法を駆使し、古典柄を生かしながらも闊達な筆づかいで絵や文字を描いた器は、個性的でアートセンスに溢れていますが、いざ料理を盛り付けると主役の引き立て役に回るから不思議。料理研究家の栗原はるみさんなどプロの料理人にファンが多いのもうなずけます。

最近では「リサイクルショップを訪ねるのが楽しみ」という万作さん。べっ甲色に輝く一輪ざしは、そこで見つけた百年ほど前の横笛で作ったもの。持ち前の洒脱な遊び心が、陶芸というジャンルを超えて弾けます。

おおらかで心がほっこりと和む万作さんの食器。染付、色絵など伸びやかで自在な筆づかいで描かれた器は、見ているだけでも楽しい。豊中市にある「うつわ一客」（Tel:06(6871)9020）で取り扱いがあります。

ロクロを回し、小刀で高台を削りながら底を軽く叩いて、音を聞きながら厚みを調整します。

※釉掛け=素焼きの陶磁器の表面に釉(うわぐすり)をかけること

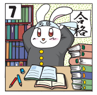
作品の魅力をひもとく ～万作さんの詩～

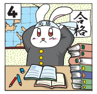
「創るものは皆　拙なきものばかりなり
毎日喧嘩をし　憎まれ口をたたくが
笑いの絶える時なし
かなしい事　うれしい事　さみしさや
楽しさ　苦しさは皆　泥にまじりて形と成す
ぶさいくなぐい呑みは
腹をすかした時の出来なり
大きな絵皿は　幼き頃の残像を写し
今日のたのしさは　秋草の徳利と化す」

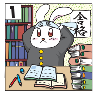
［工芸誌「無尽蔵」の創刊号（1977年6月）に寄稿］

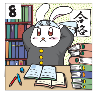
ホンモノはどれ?

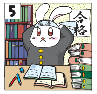
正解の方から抽選で図書カード（2000円）を5名の方にプレゼントします。

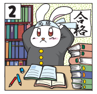

7

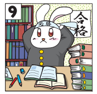

4

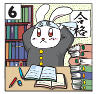

1

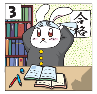

8

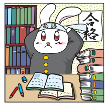

5


2


9


6


3



応募方法 ホンモノの答え、住所、氏名、電話番号、年齢、職業、本誌の感想・要望などを明記の上、欄外の宛先「ホンモノはどれ?」係へハガキ、またはファックスでご応募ください。
※2月28日締切 消印有効。 ※当選発表は発送をもってかえさせていただきます。〈No.238の正解は①でした〉

ちょっとE～Column エコラム

第5回 地域の特色に目をむける

少し前の話ですが、買い物中に一枚の旅行パンフレットが目に付いたので見てみたら、某大手旅行会社が企画した河内長野の歴史自然スポット巡りと、名産品お買い物ツアーでした。その旅程に出てくる場所や見どころは、地域の人にとっては、存在自体が自然すぎてしまうのかもしれません。でも、地域外の方にとっては自然すら新鮮で魅力的なものであることは、ツアーの人気ぶりからもうかがえました。

また、昨年の秋に関西サイクルスポーツセンターで、アニメソングの帝王こと水木一郎さんの自転車発電ライブというのが行なわれたのですが、発電機のついた自転車のペダルを観客の皆さまがライブ中、交替で漕ぎ続けて必要な電気を供給するというエコでユニークなライブでした。

サイクルスポーツセンターという自転車のテーマパークは全国的にも貴重な施設ということもあり、老若男女への根強い人気と歴史を誇っています。そこにエコを融合させた、関スポならではの取組みだなと思いました。

他にもこの地域をドラマや映画のロケ地として誘致する試みがあるなど、河内長野という地域の特徴を活かした取組みが、近年課題とされている地域活性化にも繋がるのでしょうね。自然と歴史とモノとヒト。地域に暮らす私たちから再発見してみましょうよ。

一年間ご覧頂いたこのコラム、実は今号が最終回となります。でも、ちょっとエコな話題は本誌や弊社が開催・参加するさまざまなイベントなどで今後もお届けしていきますので、ご期待ください。

［プレゼント・読者企画のご応募先］ ●ハガキ 〒586-0025 大阪府河内長野市昭栄町14-32 株式会社リビングセンター長野 ●ファックス 0721-53-8775 ※FAX番号はお間違いのないようにお願い致します。